学位論文要旨

大谷光瑞の研究－アジア広域における諸活動－

柴　田　幹　夫

Ⅰ．　論文題目

大谷光瑞の研究　－アジア広域における諸活動－

Ⅱ．　論文目次

序章

第一部　大谷光瑞とアジア

第一章　大谷光瑞とロシア　－ウラジオストク本願寺をめぐって－
　　第一節　本願寺と海外開教
　　第二節　ウラジオストク本願寺
　　第三節　太田覚眠という人
　　第四節　大谷光瑞とウラジオストク

第二章　大谷光瑞と満州
　　第一節　本願寺関東別院
　　第二節　大谷光瑞と大連
　　第三節　大谷光瑞と満州

第三章　大谷光瑞と上海
　　第一節　上海日本人居留民と仏教
　　第二節　大谷光瑞と上海
　　第三節　孫文との交流

第四章　大谷光瑞と漢口
　　第一節　漢口の歴史的位置について
　　第二節　租界地としての漢口
　　第三節　漢口本願寺出張所
　　第四節　大谷光瑞と漢口観

第五章　大谷光瑞と台湾－「逍遙園」を中心にして－
　　第一節　本願寺派の台湾開教
　　第二節　大谷光瑞の台湾訪問
　　第三節　「逍遙園」について
　　第四節　大谷光瑞の夢

第六章　大谷光瑞とシンガポール
第一節　シンガポール本願寺
第二節　大谷光瑞とシンガポール

第二部　大谷光瑞の中国認識

第一章　大谷光瑞と辛亥革命
第一節　本願寺教団と国家
第二節　辛亥革命と本願寺
第三節　革命党と本願寺
第四節　本願寺の中国開教

第二章　大谷光瑞と『支那論』の系譜
第一節　明治以降対中国観の変遷
第二節　『支那論』の系譜
第三節　中央アジアへの憧憬－大谷光瑞と内藤湖南－

終章

付録　大谷光瑞年譜

Ⅲ.　論文要旨

序章

19 世紀末から 20 世紀中葉にかけてアジア広域に足跡を残した大谷光瑞（1876 ～ 1948）という一人の日本人の行動を、アジアの諸地域とアジア近代史の中にどのように位置づけていくのか、その試みが「大谷光瑞の研究－アジア広域における諸活動－」と題する本論文であり、大谷光瑞がアジア各地を就中中国をどのように認識していたかということを明らかにするものである。

大谷光瑞は、京都本願寺・浄土真宗本願寺派第二十二世法主（以下本願寺といえば、西本願寺を指す）であり、宗祖・親鸞の法灯と血統を二つながら継承して他に誰も代わりうるものがない希有の存在であった。彼はその宗教的権威を遺憾なく活用し、明治後半期から大正初期の間に巨大真宗教団の頂点に立っただけでなく、並行してアジア諸地域でも広く活動を展開した。1914（大正 3）年、彼は、本願寺の膨大な負債を背景とする疑獄事件の責任を取って法主を辞任することになったが、不思議にも彼の社会的ステイタスは失墜することはなく、元本願寺法主であったことを背景に、かえって自由にアジア諸地域で活動を展開した。

しばしば強調されるように大谷光瑞を特色付けるのは、仏教伝来の道を探索した「大谷探検隊」（近年の新説によれば、「アジア広域調査活動」）であることは間違いないことで

あろう。しかしその探検事業は、大谷光瑞の長期にわたる活動総体から見ればすべてではなく、一部にしか過ぎない。従って、大谷光瑞像の総体を求めるには、「大谷探検隊」とともに彼の行動の総体そのものに比重を移し、追究すべきであろう。海外開教、特に清国開教の先導者としての姿、あるいは法主辞任後の実業家としての姿も求めていかなければならない。彼はアジア各地で、「絹織物の生産」「ゴム園」「コーヒー園」などの事業を手がけた。海外開教はともかくも、営利を求めるような海外経済活動は、宗教者にはあるまじき行為と見えてしまう。まったく視点さえも当てられず研究の対象とされなかったのはそのためであろう。しかし大谷光瑞の言葉を借りれば、それらは海外開教を含めて「国家の前途」を考えての行為なのだという。これが大谷探検隊を主宰した大谷光瑞と同一人物の自己認識の基底なのである。

本研究で使用する史料は、本願寺派の機関誌『教海一瀾』、宗教新聞の『中外日報』、一般紙の『大阪毎日新聞』、『台湾日日新報』、そして外務省外交史料館蔵の「外交記録」(「外交文書)、『鏡如上人年譜』、『本願寺史』、『東本願寺上海開教六十年史』、『本派本願寺台湾開教史』、シンガポール本願寺出張所主任であった渡辺智修の『日記』(未定稿)などを用いる。

【第一部】大谷光瑞とアジア

大谷光瑞のアジア各地域(ロシア極東地域を含める)での活動の詳細を具体的に明らかにする。

第一章　「大谷光瑞とロシアーウラジオストク本願寺をめぐってー」

本章では、ウラジオストク本願寺に関わる大谷光瑞の動向を検討する。

明治中期から後期にかけて日本の対外発展の一形態として「北進論」を挙げることができる。当時ロシアは、アヘン戦争における清国の敗北を背景に、露清間のネルチンスク条約を無効とし、東方経略の拠点を沿海州に求めた。

日本は、こうしたロシアの動きにいち早く対応し、1876（明治 9）年 6 月ウラジオストクに貿易事務館を開設した。沿海州方面の日本人居留民を管理する日本政府の公的機関であった。当時ウラジオストクには、船を修理するドックはなく、長崎まで回航していた。またウスリー鉄道（シベリア鉄道）が着工されると、出稼ぎとしての日本人移住者は急激に増加した。九州出身者が多く、中でも長崎県人が圧倒的に多かった。

1870 年代半ばの長崎英国領事からの報告によれば、長崎港への入荷のほとんどが上海からの輸入品であったという。それは山東半島の商人（特に芝罘商人）の上海～山東～仁川～長崎～元山～ウラジオストクを結ぶ貿易ルートと深く相関していた。長崎を媒介として上海とウラジオストクが結びついていたのである。大谷光瑞が、上海、青島、大連、ウラジオストクを重視していたのは、この流通の仕組みと日本人の動向をしっかりと把握していたからである。だからこそ本願寺は、日本の「北進論」の一翼を担うが如くウラジオストクに本願寺の布教場を立て、日本人居留民のために布教を開始したのである。これこそ本願寺教団海外開教の嚆矢であった。やがて布教場は、「浦潮本願寺」へと発展した。布教場の敷地、建設問題は、「外交問題」となり、大谷光瑞自ら外務大臣に「陳情書」を提出し、問題の処理を計ったのである。従って、浦潮本願寺起工式に大谷光瑞が直接出向い

たのは、あまりにも自然なことであった。

第二章　「大谷光瑞と満州」

本章では、大谷光瑞と満州・大連の関係を日露戦争の勃発と、大連本願寺（関東別院）の建立を通じて検討する。

大連本願寺の創設と発展には、二つの視点が必要である。一つは、本願寺の大連開教は日露戦争の勃発とともに始まり、それが大連関東別院の創設と発展に繋がったという視点である。他方二つ目は、関東別院内に「大連倶楽部」「仏教婦人会」「仏教青年会」などを作り、在留邦人の為に交流の場を提供するとともに、「幼稚園」や「外国語研究所」そして女子技芸学校」などの教育施設も設けた。このように大連関東別院は、日本人社会にとって、中心的な存在であった。すなわち宗教活動とリンクさせた社会活動・教育活動に特色があった。これが大連関東別院の不断なき発展に繋がったと思われる。

当時の大連では、「大連に縁があるものは、すべて満鉄とも縁がある」といわれていた。本願寺は、その満鉄の大株主でもあった。大谷光瑞はしばしば満鉄本社で講演をなし、満鉄読書会などにも顔を出し、自らの学生を満鉄の農業試験場などに送り込み、さらには満鉄が支援事業としていた図書館や博物館にも深く関与した。

こうして大谷光瑞は、日露戦争後、大連関東別院の創建によって邦人の精神的中核となっただけでなく、満鉄を介しつつ極めて高い社会的ステイタスを確保することに成功したといえよう。

第三章　「大谷光瑞と上海」

大谷光瑞と上海との関係を、上海日本人居留民社会と孫文との交流を中心にして検討する。

大谷光瑞は、中国において最も重視した都市は上海であった。1899（明治 32）年、「清国巡遊」の途上、この地を訪問して以後、青年時代から晩年にかけて最も長く上海に居住した。西洋列強諸国の租界が集中する上海は、世界の大都市、東洋の魔都と呼ばれように世界中から「ヒト」や「モノ」が集まった。大谷光瑞は、上海を東京や京都を凌駕する都市だと認識し、またロンドンやニューヨークに引けを取らない国際都市としてみなしていた。

大谷光瑞の上海での活動を特色付けるのは、(1) 本願寺上海別院と上海居留民社会での活動、(2) 中国の革命家・孫中山（孫文）との交流であったといえるであろう。

上海別院（前身は本願寺上海出張所）は、本願寺の中国開教の拠点として 1906（明治 39）年に設置されたものである。その中に「清国開教総監部」を置き、大谷光瑞は、開教総監に弟・大谷尊由を当てた。またその後、「中南支開教教務所」も設置し、大陸布教の中心地となった。

さらに大谷光瑞は、上海で中国革命の父と呼ばれた孫中山（孫文）と深い交流を持った。孫文は、辛亥革命後の 1913（大正 2）年、日本を訪問し、朝野の大歓迎を受けた。その時、わざわざ本願寺に大谷光瑞を訪問し、辛亥革命に対する様々な支援に感謝した。その支援の詳しい内容は、第二部第一章の「辛亥革命と大谷光瑞」に述べる。

第四章　「大谷光瑞と漢口」

大谷光瑞がどのような理由で漢口を重視していたか、この点を検討する。

1899（明治 32）年 1 月、大谷光瑞は、初めての外遊の地に中国を選び、上海、香港、漢口、そして北京などを周遊した。光瑞が漢口を選んだ理由は一体何であったのか。「国家の前途と宗教の将来とに付いて深く考ふる所あるに因る」のだという、その外遊目的に照らせば、漢口の地を制し、中国各地に放射線状に開教拠点を作ろうと考えたからではあるまいか。当時、漢口は長江中流地における最大の都市であり、張之洞により洋務運動が展開された最先端の地であり、中国の心臓部に相当する要地であった。日本を始め列強各国が先を競ってこの地に租界を設けた理由もそこにある。この中国の心臓部に開教拠点を作ることは、北から、南から、あるいは東からの情報を集約し、効率的な中国開教活動の展開に繋がるはずであった。その中心となるのは、1906（明治 39）年の漢口本願寺の開設であった。

1911（明治 44）年、この漢口の地で辛亥革命が勃発した。それは大谷光瑞の眼の確かさが裏付けられたといっていいだろう。ただし辛亥革命勃発後、情報の中心は上海に移りつつあった。それは東洋一の金融センターとして上海がクローズアップされたからに外ならない。それに伴い本願寺もすばやく拠点を上海に移すのである。

第五章　「大谷光瑞と台湾－高雄「逍遙園」を中心として－」

大谷光瑞は、晩年台湾を「我が帝国の如意宝珠」なりと形容したが、光瑞と台湾の関わりを「逍遙園」を中心に検討した。

台湾南部高雄に位置する「逍遙園」は、大谷光瑞の旧邸である。居を構えたのは 1940（昭和 15）年のことであった。ここで大谷光瑞は、自ら学生を率い、農業に従事し、精力的に著作活動を行っていた。そのため「逍遙園」には学生の講義室、食堂なども完備されていた。

辛亥革命以降、大谷光瑞は、第二部第二章で言及したように、中国の現況を憂い、中国から南洋そして台湾へと関心を深めていった。台湾への関心は 1940（昭和 15 年）11 月、高雄「逍遙園」の開園式に参列者に配布した一枚の皿に凝縮される。つまり台湾全景を描いた皿の周囲にバナナ、サトウキビといった台湾の特産が描かれていることによって窺い知れよう。大谷光瑞が最も重視したのは「農業」であり、「教育」であった。逍遙園の周りには農地が拡がり、大谷光瑞の学生たちは、自給自足であり、一日中農業に従事していた。

「逍遙園」と本願寺「飛雲閣」の類似性を取り上げて、大谷光瑞の夢を考えていった。また光瑞は、当地における産業開発構想や「帝国の相談役」として新たな方向性を模索した。その方向性は、「大谷光瑞興亜計画」や「欧亜連絡鉄道計画」などに見ることができよう。

第六章　「大谷光瑞とシンガポール」

本願寺とシンガポールを含む南洋との繋がりは非常に早く、それは、1898(明治 31)年、

巡教使の土岐寂静と朝倉明宣が宗教事情を調査したことに始まる。来るべき海外開教に備えてのことであろう。そして 1898（明治 31）年、シンガポールに布教所を設立した。

こうして本願寺は、シンガポール、南洋での活動を軌道に乗せたが、大谷光瑞が強い関心を向けるには少し時を要した。それは、辛亥革命後、かえって悪化してしまった中国国内の不安定な政治状況と連動するからである。革命後、袁世凱の帝政復古や彼の死後、中国各地で軍閥が割拠し、人々が安心した生活をおくることが困難になってきた。そりため光瑞の関心は中国から南洋に移っていく。1916（大正 5）年のシンガポール在留邦人名簿の中に「栽培　大谷光瑞」とその名が見える頃からである。法主辞任後、シンガポール、スマトラ島、ジャワ島を中心に活動を展開する大谷光瑞の姿が確認されよう。翌年には、蘭領印度農林工業株式会社をジャワ島スラバヤに設立し、またセレベス島メナドを根拠にして大森林の開拓に着手した。しかしその後は、ジャワ島に集中し農園の経営を開始した。南洋に深い造詣と知識を持っていた大谷光瑞は、マレー半島におけるゴム園経営などにも関与していくことになる。さらに陸軍省からの依頼で「マレー半島善後処理方案」を草している。「帝国の相談役」を自任していた大谷光瑞である。その後の日本の南方への関心に影響を与えたことは推定される。今後その検証が課題となろう。

【第二部】大谷光瑞の中国認識

大谷光瑞が中国をどのように認識していたのか、それを辛亥革命と彼の著作『支那論』を通じて検討する。

第一章「大谷光瑞と辛亥革命」

大谷光瑞や本願寺教団が、辛亥革命をどのように認識し、未曾有の混乱に対してどのように対応したかを検討する。

大谷光瑞は、辛亥革命勃発当初から一貫してこの革命に積極的に関わった。教団内に「特設臨時部」を設置して中国通の僧侶を数多く派遣し、革命の戦乱で負傷した兵士の救護活動や死屍の収容まで行い、また在留邦人や日本の派遣軍隊に対しては、布教とともに慰問活動も展開させた。その意図するところは何か、それは軌道に乗っていた中国開教とどのように相関していたのであろうか。

大谷光瑞は、アジア主義者と呼ばれるように本願寺教団の法主としてのみ捉えきれるような人物ではない。したがって彼の脳裏には、中国における本願寺教団の教線拡大だけ、つまり宗教上の問題に矮小化できない辛亥革命への関わり方は当然あったはずである。辛亥革命は二千年来の皇帝政治に終わりを告げ、新しい共和政治を中国にもたらした。この革命期に遭遇した日本の一仏教教団・本願寺とその法主大谷光瑞は、教団という特異な存在形態を背景として積極的に辛亥革命と、官革両勢力と関わって、革命後の中国政局に一定の発言力を持とうとしたことは疑いない。

しかしこうした本願寺の活動は、辛亥革命の勃発によって突如としてその力を発揮したものではない。近代における本願寺の活動総体そのものに無関心な近代史の現状からすれば信じられないことであろうが、本願寺の眼はすでに早くから世界に向かって開かれていた。日露戦争後の国際社会の大きな変動の過程で一挙にクローズアップされたチベット問題などについては、もはや大谷光瑞や本願寺の活動は無視できないものとなっていた。こ

うした背景には、本願寺教団は、当時中国だけでも、外務省の大使館、総領事館、領事館などと肩を並べるほどのネットワークを構築していた。

本願寺、大谷光瑞はこうしたネットワークによって辛亥革命に対応し、組織だった活動を大規模に展開させた。それは本願寺にとって国内的にも対外的にも高い評価を得たことは想像に難くない。本願寺はこのような成果を背景にして中国への日本仏教の布教をさらに進めるのである。不断にもたらされる現地情報を分析しながら本願寺の対中戦略が構築されていくようになったのである。これが本願寺による仏教西漸であるが、その指向性こそが大谷光瑞のいう「国家の前途」と重複するのだと私は考える。そしてそれは自ずと日本の対中政策とも重なるものになっていくのである。

第二章　「大谷光瑞と『支那論』の系譜」

明治期以降の日本の対中国認識を大谷光瑞と内藤湖南の「支那論」を中心に検討したものである。

日本と中国の関係は、「一衣帯水」とか、「輔車唇歯」と形容されるほど深くて近い関係にあり、日本はその隣国から大きな影響を受けてきたことはいうまでもない。しかしアヘン戦争の敗北を契機として、中国は大きく動揺し、「明治維新」を成功させ、先に近代化を達成した日本にも敗北した。東海の小国「日本」に敗れた時、清国の知識人の多くは、手を地面に打ちつけて泣き叫んだという。文明国家・中国に従属するとみなしていた野蛮な小国日本との関係が逆転したからである。

一方日本では、文明国日本、野蛮国中国という新しい図式のもと、「アジア東方の悪友」と縁を切り、進んだ西洋諸国の仲間入りを果たそうとする風潮が強くなった。また積極的に隣国中国に意見をしようという気運も出てきた。「支那論」がそれである。「支那論」とは、著作としての『支那論』だけでなく、隣国中国をどう見るか、どういう態度を取るべきなのかという対中国観も内包させる用語でもある。その代表は、京都大学教授であった中国学者・内藤湖南、そして大谷光瑞、さらに歴史学者・思想史家であった竹越与三郎、評論家であった山路愛山等であり、それぞれに著作『支那論』がある。ここでは、それぞれ四人の『支那論』を取り上げ、大谷光瑞と内藤湖南の考え方を比較する。

大谷光瑞の支那論は中国に対して罵詈雑言の連続ではあるが、これを以て大谷光瑞の真意と直裁に判断するのはあまりにも短絡的である。なぜならば、前述したように同時期に孫文をはじめとする革命派に大いに期待しているからである。

大谷光瑞は何の目的を以て『支那論』を書いたかは記していない。しかし講演録や、本文を読んでみると、中国の状況をはっきりと日本人に認識させるために書いているといっている。五・四運動に代表される対華 21 ヶ条の要求後の日本に対する反日運動の高まりの中で、日本人の取るべき行動を模索していたのであろう。

終章

以上、検討してきたことから、次のことが明らかとなった。

(1) ロシアウラジオストク開教においては、「北進論」の立場を十分に理解し、また長崎を媒介とした貿易により、ウラジオストクは軍港として、また商港として発展可能なところだという認識に至った。本願寺教団や大谷光瑞は「国家の前途と宗教の将来」を常に考

え、この地に本願寺を創設し、国家と並行する発展を意図していた。

(2) 大連関東別院の創設、発展については、二つの要素からなることが明らかになった。一つは、日露戦争に際しての従軍布教であり、もう一つは在留民社会に対する社会活動、教育活動である。

(3) 大谷光瑞は、「東洋の魔都」「アジアの金融センター」と呼ばれた上海を殊の外重視した。そこは世界の情報が集まってくるところであった。居留民社会の中に君臨し、中国革命の父と呼ばれた孫文と交流することによって、光瑞の上海での地位を不動のものとした。

(4) 大谷光瑞の始めての外遊の地は、中国であり、漢口を中心にして周遊した。漢口は中国の要地であり、心臓部であった。また東西南北から様々な情報が集まるところでもあった。ここに本願寺を設立し、放射線状に中国各地に本願寺の教線を開こうとしたのである。

(5) 大谷光瑞は、台湾を「如意宝珠」の地と視ていた。それは熱帯農業を中心として、地の利に恵まれていることに外ならなかった。台湾の「産業振興」を計るために、「熱帯産業調査会」委員になり、「帝国の相談役」として、台湾のために奔走するのである。光瑞の拠点の一つであった高雄「逍遙園」は、建築意匠上、本願寺の「飛雲閣」と酷似している。光瑞の原体験を「逍遙園」において具現化したものと考える。それはまさしく、大谷光瑞の「夢」そのものであったのである。

(6) 辛亥革命以後、袁世凱の帝政復活、討袁運動などにより、中国各地には軍閥が割拠するようになった。大谷光瑞はこのような事態を憂い中国から南洋に拠点を移した。南洋では主に産業振興を重視し、シンガポールにおいてはゴム園の栽培などに従事した。また「マレー半島善後処理方案」を草するなど、シンガポール、マレーシアに深く関わった。

(7) 漢口で辛亥革命が勃発したが、いち早く革命の中で斃れた中国人兵士を革命軍、清国軍を問わず、救護し、また死屍の埋葬などを行った。居留民に対し組織的に救護活動を展開し、慰問袋に代表される教団を挙げての支援を行い、さらに日本から派遣された兵士に対しても慰問行動を行った。このような活動に対して、革命軍の司令官であった黎元洪や中華民国臨時大総統である孫文から感謝状が贈られるほどであった。

(8) 大谷光瑞を含む四人の「支那論」を概括すると、光瑞は決していわれるほどの中国に対して強硬論者ではなかったようである。もちろん言葉だけを捉えると、中国に対しては強硬論者であるが、それは中国が自浄能力が欠如した結果であり、ある種、絶望から発せられた言葉であるといえよう。それは内藤湖南の中国観とも共通するところがある。

本研究では、大谷光瑞が常に「国家の前途と宗教の将来」について考えていたことを具体的に明らかにした。それはまた「アジア主義者」としての一面でもある。仏教を紐帯としてアジア各地を一つにしようとしたのではあるまいか、もちろん日本の国策に絡んでの話であるが、このことは今後の検証に委ねたい。

Ⅳ.　史料・参考文献

１．史料

(1) 大谷光瑞関係
朝日新聞社『朝日新聞』(大阪)(東京)。
上原芳太郎『外遊記稿』「南船北馬」(未定稿)、龍谷大学大宮図書館蔵。
大阪毎日新聞社『大阪毎日新聞』。
大谷光瑞『西域考古図譜』国華社、1915 年。
『小川平吉関係文書』みすず書房、1973 年。
外務省外交史料館『外務省記録』。
「神根善雄資料」(未定稿)。
教海雑誌社『教海一瀾』1897 年。
教学参事部編『清国巡遊誌』仏教図書出版、1900 年。
『鏡如上人年譜』鏡如上人七回忌法要事務所、1954 年。
近藤正巳、北村嘉恵、駒込武編『内海忠司日記』京都大学学術出版会、2012 年。
瑞門会編『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』、1978 年。
『孫中山先生記念誕辰百三十周年写真集』上海人民出版社、1996 年。
『孫中山全集』中華書局、1986 年。
『大乗』大乗社。
台湾日日新報社『台湾日日新報』。
中外日報社『教学報知』『中外日報』1898 年。
陳錫祺編『孫中山年譜長編』(上)(下)中華書局、1991 年。
『内藤湖南全集』筑摩書房、1996 年版。
「柱本瑞俊関係史料」(未定稿)。
柱本照映編『桃源山明覚寺誌』。
『日出新聞』。
『文藝春秋』1938 年 12 月号。
「水野梅暁関係文書」(未定稿)、東京大学法学部附属近代法政資料センター原資料部。
『渡辺智修日記』(未定稿)。
旅順博物館編『旅順博物館二十年史』(未定稿)。

(2) 本願寺関係
上原芳太郎編『明如上人略年表』真宗本願寺派護持会財団、1935 年。
『海外開教要覧』本願寺海外開教要覧刊行会、1974 年。
『京都府百年の史料』六、宗教編。京都府立総合資料館、1972 年。
浄土真宗本願寺派国際部編『アジア開教史』本願寺出版社、2008 年。
『真宗人名辞典』法蔵館、1999 年。
『真宗本派本願寺台湾開教史』真宗本派本願寺台湾別院、1935 年。
『大連市史』大連市役所、1936 年。

『高輪同窓倶楽部名簿』高輪同窓倶楽部、1927 年。
槻木瑞生　「『中外日報』紙のアジア関係目録」『同朋大学仏教文化研究所紀要』17 号、1997 年。
『東京生命七十年史』東京生命保険相互会社、1970 年。
『日華学堂日誌』日華学堂(未定稿)。
『東本願寺上海開教六十年史』東本願寺上海別院、1937 年。
宝閣善教『燈焔録』『行雲録』(未定稿)。
本願寺史料研究所編『本願寺史』三巻、浄土真宗本願寺派宗務所、1969 年。
『本願寺新報』。
『満州日日新聞』。
『明如上人伝』明如上人伝記編纂所、1932 年。
『明教新誌』。
明治期外交資料研究会編『外務省制度・組織・人事関係調書集　外務省年鑑』明治四十三、四十四年度(復刻版) クレス出版、1995 年。

２．参考文献

第一部

(1)「大谷光瑞とロシアーウラジオストク本願寺をめぐってー」

芦屋市立美術博物館編『二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館、1999 年。
太田覚眠『露西亜物語』丙午出版社、1926 年。
大谷光瑞『放浪漫記』民友社、1917 年。
加藤九祚『シベリア記』潮出版社、1980 年。
新潟市美術館『浦潮とよばれた街』、新潟市美術館、2008 年。
原暉之『ウラジオストク物語』三省堂、1998 年。
麓慎一「大谷光瑞と樺太－日露戦後における西本願寺の樺太布教」柴田幹夫編『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡ー』勉誠出版、2010 年。
麓慎一「ウラジオストック本願寺からシベリアへ」柴田幹夫編『アジア遊学』156 号、『大谷光瑞－国家の前途を考える』勉誠出版、2012 年。
古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版社、2000 年。
本派本願寺『西比利亜開教を偲ぶ』内外出版印刷、1939 年。
松本郁子『太田覚眠と日露交流－ロシアに道を求めた仏教者』ミネルヴァ書房、2006 年。
三谷真澄「大谷光瑞とロシア」 柴田幹夫編『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡ー』勉誠出版、2010 年。

(2)「大谷光瑞と満州」

倉方俊輔　「伊東忠太の西本願寺関係の計画について－明治期の図面類に見る伊東忠太の設　計活動　その二」『日本建築学会計画系論文集』第 566 号、2003 年。
顧明義編『大連近百年史』遼寧人民出版社、1999 年。
榊谷仙次郎日記刊行会『榊谷仙次郎日記』、1969 年。
鈴木博之『伊東忠太を知っていますか』王国社、2003 年。

新田光子「西本願寺関東別院と大谷光瑞」『仏教史研究』38 号龍谷大学仏教史学会、2001 年。
野世英水「真宗教団の中国開教と大連」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』40 集、2001 年。
松尾為作『南満州ニ於ケル宗教概観』関東庁教化事業奨励資金財団、1906 年。
水野梅暁『満州文化を語る』支那時報社、1935 年。

(3)「大谷光瑞と上海」

加藤斗規「上海における大谷光瑞(一)」『東洋史苑』50.51 号龍谷大学東洋史学研究会、1997 年。
『久原房之助』久原房之助翁伝記編纂会、1970 年。
小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』法蔵館、1994 年。
柴田幹夫 「孫文と大谷光瑞」『孫文研究』21 号、1997 年。
白須淨眞監修『鏡如上人五十回忌法要』本願寺別府別院、1997 年。
白須淨眞 「上原芳太郎『外遊記稿』所収の「南船北馬」－その解説と録文－『龍谷史壇』103・104 号、1994 年。
『辛亥革命研究』第 5. 6 号、辛亥革命研究会、1985、1896 年。
高杉晋作 「航海日録」東行先生五十祭記念会編『東行先生遺文』民友社、1916 年。
常光浩然『明治の仏教者』春秋社、1972 年。
納富介次郎 「上海雑記」『文久二年上海日記』全国書房、1946 年。
日本上海史研究会編『上海－重層するネットワーク－』汲古書房、2000 年。
仁本正恵「本願寺の明星」『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』瑞門会、1978 年。
野世英水「戦時下真宗教団の海外開教」『解放の真宗』第 2 号、1994 年。
廣田四郎『法主大谷光瑞上人伝』国光館、1910 年。
松田江畔編『水野梅暁追懐録』(私家版)、1974 年。
遊有雄『近代上海仏教簡史』華東師範大学出版社、1988 年。『満州建築協会雑誌』11 巻 6 号、満州建築協会、1931 年。

(4)「大谷光瑞と漢口」

『漢口事情』日清汽船株式会社、1914 年。
さねとうけいしゅう『中国留学生史談』第一書房、1981 年。
柴田幹夫 「大谷光瑞初めての外遊」『東洋史苑』50・51 号、龍谷大学東洋史学研究会、1997 年。
柴田幹夫「清国巡遊誌を読む」柴田幹夫編『大谷光瑞－国家の前途を考える』、『アジア遊学』156 号、勉誠出版、2012 年。
白須淨眞 「上原芳太郎『外遊記稿』所収の「南船北馬」－その解説と録文－」『龍谷史壇』103・104 号、1994 年。
田中哲厳編『漢口本願寺創建顛末』漢口本願寺、発行年月日不明。
中島裁之 「支那伝道に就て」『反省雑誌』第 10 年第 8 号、1891 年。
野世英水 「真宗本願寺派の武漢開教と漢口本願寺」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』42 号、2003 年。

野世英水　「大谷光瑞と漢口」柴田幹夫編『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡ー』勉誠出版、2010 年。
費成康『中国租界史』上海社会科学出版社、1992 年。
馮天瑜、何曉明『張之洞評伝』南京大学出版社、2009 年。
水野幸吉『漢口』冨山房、1907 年。
李廷江　「日本軍事顧問と張之洞」1987 ー 1907」『アジア研究所紀要』27 号、亜細亜大学アジア研究所、2002 年。

(5)「大谷光瑞と台湾ー「逍遙園」を中心にしてー」

石井光次郎『改装八十八年』カルチャー出版社、1976 年。
大谷光瑞『大谷光瑞興亜計画』大乗社、1939 年。
大谷光瑞『台湾島の現在』大乗社、1940 年。
加藤斗規　「大谷光瑞と台湾」柴田幹夫編『アジア遊学』156 号、『大谷光瑞ー国家の前途を考える』勉誠出版、2012 年。
許介麟『日本殖民統治賛美論総批判』台北文英堂出版社、2006 年。
許世楷『日本統治下の台湾』東京大学出版会、1972 年。
小出亨一　「大谷学生と瑞門会」柴田幹夫編『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡ー』勉誠出版、2010 年。
小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』法蔵館、1992 年。
黄朝煌「日治晩期高雄市大谷光瑞的逍遙園之源流與建築構成」高雄大学都市発展與建築研究所提出碩士(修士）論文、2009 年。
柴田幹夫　「台湾「西本願寺広場」と「逍遙園」について」『東方』387 号、2013 年。
周婉窈、濱島敦俊監訳『図説台湾の歴史』平凡社、2013 年。

(6)「大谷光瑞とシンガポール」

明石陽至　「渡辺軍政ーその哲理と展開」明石陽至編『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』 岩波書店、2001 年。
上原芳太郎　「四十年前の蘭印」『大乗』第 19 巻 9 月号、1940 年。
上原芳太郎『外遊記稿』(未定稿)、1905 年。
大谷光瑞『食』大乗社東京支部、1931 年。
柴田幹夫　「水野梅暁と日満文化協会」『仏教史研究』38 号、龍谷大学仏教史学会、2001 年。
柴田幹夫　「シンガポール本願寺と日本語学校」『環日本海研究年報』14 号、新潟大学環日本海研究会、2007 年。
篠原徳之　「郷土の先覚者小嶺磯吉物語」『嶽南風土記　有家史談』創刊号、有家町史談会、1994 年。
清水黙爾『紫楓全集』鶏聲堂書店、1907 年。
シンガポール日本人会編『戦前シンガポールの日本人社会』Kyodo Printing Co Ltd. 2004 年。
『南洋の五十年』南洋及び日本人社、1938 年。

西村竹四郎『在南三十五年』安久社、1936 年。
西村竹四郎『シンガポール三十五年』東水社、1941 年。
広瀬覚『大谷光瑞と現代日本』文芸社、2001 年。
矢野暢『南進の系譜』中公新書、1975 年。

第二部

(1)「大谷光瑞と辛亥革命」

漢口租界志編纂委員会編『漢口租界志』武漢出版社、2003 年。
櫻井良樹『辛亥革命と日本政治の変動』岩波書店、2009 年。
信楽峻麿 「真宗における真俗二諦論の研究」(その一)『龍谷大学論集』418 号、1981 年。
信楽峻麿 「真宗における真俗二諦論の研究」(その二)『真宗学』65 号龍谷大学真宗学会、1982 年。
孫安石 「漢口の都市発展と日本租界」『人文研究』149 集神奈川大学人文学会、2003 年。
柴田幹夫 「孫文と大谷光瑞」『孫文研究』21 号 孫文研究会、1997 年。
柴田幹夫 「孫中山與大谷光瑞」『孫中山與現代文明』蘇州大学出版社、1997 年。
柴田幹夫 「大谷光瑞初めての外遊」『東洋史苑』50・51 号龍谷大学東洋史学研究会、1998 年。
柴田幹夫 「漢口の歴史的位置づけと本願寺」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』42 号、2003 年。
白須淨眞 「上原芳太郎『外遊記稿』所収の「南船北馬」－その解説と録文－『龍谷史壇』103・104 号、1994 年。
白須淨眞 「一九〇八年(明治四十一)八月の清国五台山における一会談とその波紋－外交記録から見る外務省の対チベット施策と大谷探検隊－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、56 号、2007 年。
常光浩然『明治の仏教者』春秋社、1972 年。
野世英水「真宗本願寺派の武漢開教と漢口本願寺」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』42 号、2003 年。
野世英水 「大谷光瑞と漢口」柴田幹夫編『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡－』勉誠出版、2010 年。
山崎龍明『宗教と真宗－「真俗二諦」問題を問う』大蔵出版、1996 年。
李廷江 「辛亥革命と日本の反応」『亜細亜大学国際関係紀要』8 巻 1 号、1998 年。

(2)「大谷光瑞と『支那論』の系譜」

安藤徳器『西園寺公と湖南先生』言海書房、1936 年。
大谷光瑞『支那論』民友社、1916 年。
高田幸男 「清末江蘇の教育界と地域エリート」日本上海史研究会編『中国近代の国家と社会－地域社会・地域エリート・地方行政－』、1993 年。
竹越与三郎『支那論』民友社、1894 年。
徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』民友社、1917 年。
納富介次郎 「上海遊記」『文久二年上海日記』全国書房、1946 年。

内藤湖南『支那論』『内藤湖南全集』5 巻 筑摩書房、1996 年。
福本勝清『中国革命を駆け抜けたアウトローたち』中公新書、1998 年。
山路愛山『支那論』民友社、1916 年。
吉野作造『明治文化全集』(九) 日本評論社、1927 年。
J.A.Fogel・井上裕正訳『内藤湖南ポリティクスとシノロジー』平凡社、1995 年。

研　究　業　績

【著書】

1. 著書（共著）

(1)「大谷光瑞と上海」小島勝・馬洪林編『上海の日本人社会』－戦前の文化・宗教・教育－　永田文昌堂　1999 年 5 月, pp.83-112.

(2)「上海日本人居留民と仏教」日本上海史研究会編 『上海』－重層するネットワーク－汲古書院　2000 年 3 月, pp401-425.

(3)「上海の日本人僧侶」菊池敏夫編『上海職業さまざま』勉誠出版　2002 年 8 月, pp48-51.

(4)『アジア遊学』123 号「シンガポール都市論」勉誠出版, 2009 年 6 月.

(5)『大谷光瑞とアジア』－知られざるアジア主義者の軌跡－　勉誠出版　2010 年 8 月「はじめに」「大谷光瑞研究実情と課題」pp3-18,「大谷光瑞小伝」pp21-59,「大谷光瑞と大連」, pp131-169.「大谷光瑞年譜」.

(6)「辛亥革命と大谷光瑞」白須淨眞編『大谷光瑞と国際政治社会－チベット、探検隊、辛亥革命－』勉誠出版, 2011 年 10 月, pp189-249.

(7)『アジア遊学』156 号「大谷光瑞」－国家の前途を考える－　勉誠出版, 2012 年 8 月「序言」pp4-8,「清国巡遊誌を読む」pp31-46.

2.【学術論文】

（日本文）

(1)「康有為の教育思想」龍谷大学大学院編集紀要編集委員会 『龍谷大学大学院研究紀要』人文科学 14 集, 1993 年 3 月, pp.51-62.

(2)「大谷光瑞と上海」龍谷大学仏教文化研究所『龍谷大学仏教文化研究所紀要』 第 35 集, 1996 年 12 月, pp 64-74.

(3)「孫文と大谷光瑞」孫文研究会『孫文研究』21 号, 1997 年 1 月, pp1-14.

(4)「康有為の日本認識－『日本変政考』を中心として－」 龍谷大学史学会『龍谷史壇』108 号, 1997 年 3 月, pp44-62.

(5)「大谷光瑞初めての外遊」　龍谷大学東洋史学研究会『東洋史苑』50.51 号, 1998 年 1 月, pp85-105.

(6)「康有為と清末留日政策」　新潟大学東アジア学会『東アジア・社会と文化 8 号, 1999 年 3 月, pp7-22 頁.

(7)「大谷光瑞と支那論の系譜」三島海雲記念財団「研究経過報告書」, 1999 年 9 月, pp30-34.

(8)「大谷光瑞と大連」龍谷大学仏教文化研究所『龍谷大学仏教文化研究所紀要』39 号, 2000 年 11 月, pp140-146.

(9)「水野梅暁と日満文化協会」龍谷大学仏教史学会『仏教史研究』38 号, 2001 年 10 月, pp46-69.

(10)「大谷光瑞とウラジオストク」浦潮本願寺記念碑建立を支援する会『浦潮本願寺記念誌』, 2001 年 11 月, pp48-54.

(11)「『萬里獨行紀』と中島裁之」龍谷大学東洋史学研究会『東洋史苑』59 号, 2002 年 2 月, pp20-45.

(12)「旅順博物館の大谷探検隊将来品について」　新潟大学プロジェクト推進経費報告書『敦煌文献とその出土地域に関する総合的研究』－敦煌文献の総合的・学際的研究Ⅱ－, 2002 年 3 月, pp34-42.

(13)「漢口の歴史的位置づけと本願寺」龍谷大学仏教文化研究所『龍谷大学仏教文化研究所紀要』42 号, 2004 年 3 月, pp52-58.

(14)「康有為と青島」新潟大学環日本海研究室『環日本海研究年報』12 号, 2005 年 2 月, pp63-74.

(15)「シンガポール本願寺と日本語学校」新潟大学環日本海研究室『環日本海研究年報』14 号,　2007 年 2 月, pp127-145.

(16)「戦前のシンガポールにおける日本語学校について」『新潟大学国際センター紀要』3 号,　2007 年 3 月, pp12-23.

(17)「シンガポール本願寺と大谷光瑞」龍谷大学仏教史学会『仏教史研究』43 号, 2007 年 10 月, pp72-101.

(18)「内藤湖南と戊戌変法」河合文化教育研究所『研究論集』5 号, 2008 年 3 月, pp135-155.

(19)「大谷光瑞と満州」新潟大学環日本海研究室『環日本海研究年報』16 号, 2009 年 2 月, pp49-62.

(20)「大谷光瑞とシンガポール」『アジア遊学』123 号, 2009 年 6 月, pp116-124.

(21)『日華学堂日誌』1898 ～ 1900 年『新潟大学国際センター紀要』9 号, 2013 年 3 月, pp23-85.

(中文)

(1)「康有為『大同書』研究術論」『上海師範大学学報』, 1991 年第 1 期, pp74-78.

(2)「従『日本変政考』看康有為重視教育的思想『上海師範大学学報』, 1993 年第 2 期, pp109-112.

(3)「康有為與犬養毅」 広東康梁研究会編 『戊戌後康梁維新派研究論集』広東人民出版社, 1994 年 12 月, pp99-108.

(4)「孫中山與大谷光瑞」 中華炎黄文化研究会編 『孫中山與現代文明』,1997 年 10 月, pp606-612.

(5)「康有為和清末留日政策」「戊戌維新一百周年国際学術討論会」発表論文, 未定稿. 中国北京大学,1998 年 8 月.

(6)「康有為與青島」発表論文 中国青島行政学院 2007 年 10 月,未定稿.

(7)「大谷光瑞與大連和大連図書館」『大連図書館百年記念学術論文集』, 中国大連図書館, 2007 年 12 月, pp890-903.

(8)「内藤湖南和戊戌変法」康有為與改革創新学術研討会『康有為與改革創新学術研討会論文集』, 2008 年 9 月, pp349-355.

【口頭発表記録】

(1)「康有為與犬養毅」 「戊戌後康有為梁啓超與維新派学術研討会」（中国広東省南海市, 1993 年 11 月 24 日）

(2)「康有為と犬養毅」「阪神中哲談話会」（茨木市民会館, 1994 年 3 月 26 日）

(3)「大谷光瑞と上海」「龍谷大学仏教文化研究所」（龍谷大学大宮学舎, 1995 年 8 月 10

日）

(4)「康有為の日本認識」について一『日本変政考』を中心として一　「京都大学人文科学研究所」「梁啓超班」 (京都大学人文科学研究所, 1995 年 11 月 17 日)

(5)「康有為の日本認識」「龍谷大学史学大会」(龍谷大学大宮学舎, 1995 年 12 月 1 日)

(6)「孫中山與大谷光瑞」「孫中山與現代文明」学会,（上海宝山賓館, 1996 年 10 月 29 日）

(7)「大谷光瑞の足跡」「龍谷大学仏教文化研究所」(龍谷大学大宮学舎, 1996 年 11 月 28 日）

(8)「新支那論」「内藤湖南研究会」（河合塾京都校, 1997 年 6 月 21 日）

(9)「上海と大谷光瑞」「日本上海史研究会」(神田パンセホール, 1998 年 1 月 25 日）

(10)「清末留学政策と日華学堂」「新潟大学東アジア学会」（新潟大学人文学部大会議室, 1998 年 3 月 21 日）

(11)「中国近代史と大谷光瑞」「大谷光瑞師と中央アジア探険 大谷光瑞師没後五十周年記念シンポジウム」（別府ピーコンプラザ国際会議場, 1998 年 3 月 28 日）

(12)「康有為和清末留日政策」「戊戌維新一百周年国際学術討論会」（中国北京大学, 1998 年 8 月 22 日）

(13)「「支那論」の系譜」「中国近現代史懇話会」（新潟大学環日本海研究室, 1999 年 5 月 22 日）

(14)「大連の現況と研究の可能性」「龍谷大学仏教文化研究所」（龍谷大学深草学舎, 1999 年 6 月 5 日）

(15)「「支那論」の系譜一内藤湖南と大谷光瑞一」「内藤湖南研究会」 (河合塾京都校, 1999 年 10 月 9 日）

(16)「大谷光瑞と大連」「龍谷大学仏教文化研究所」（龍谷大学大宮学舎, 2000 年 11 月 14 日）

(17)「漢口における浄土真宗の開教について」龍谷大学仏教文化研究所（龍谷大学大宮

学舎, 2003 年 3 月 19 日）

(18)「漢口の歴史的位置づけと本願寺」龍谷大学仏教文化研究所（新潟月岡温泉ホテルあけぼの, 2003 年 8 月 29 日 ）

(19)「支那上古史について」内藤湖南研究会（京都パレスサイドホテル, 2003 年 11 月 29 日）

(20)「康有為・青島・日本」中国海洋大学都市文化研究センター客員研究員就任記念講演会（青島中国海洋大学, 2004 年 9 月 17 日）

(21)「内藤湖南と戊戌変法」内藤湖南研究会（河合塾京都校, 2006 年 1 月 28 日）

(22)「新潟と上海」（新潟大学駅南キャンパス, 2007 年 2 月 17 日）

(23)「大谷光瑞とシンガポール本願寺」日本近代仏教史学研究大会（駒澤大学, 2007 年 5 月 19 日）

(24)「康有為と青島」2007 中国青島康有為思想国際研討会（中国青島行政学院, 2007 年 11 月 16 日）

(25)「大谷光瑞と清国開教－神根書簡を手がかりにして－」日本近代仏教史学研究大会（立正大学, 2008 年 5 月 31 日）

(26)「大谷敏夫論文「清末から民国初にかけての地方行政と地方自治」－内藤湖南の見解に基づいて－」内藤湖南研究会（河合塾京都校, 2008 年 10 月 4 日）

(27)「康有為與戊戌変法」康有為與改革創新学術研討会（広東省南海　祈福酒店, 2008 年 9 月 26 日）

(28)「大谷光瑞とアジア」大谷光瑞研究会（龍谷大学大宮学舎, 2009 年 10 月 31 日）

(29)「大谷光瑞とアジア」新潟大学東アジア学会講演（新潟大学,2011 年 6 月 11 日）

(30) 「大谷光瑞と中国」第 8 回新潟親鸞学会（新潟県加茂市廣圓寺,2011 年 6 月 16 日）

(31) 「大谷光瑞の見たアジア」法盛寺夏期仏教大学講演（三重県桑名市法盛寺,2011 年 7 月 31 日）

(32)「満州における西本願寺日本語学校について」第 2 回中日韓朝言語文化国際学会（中国吉林省・延辺大学,2011 年 8 月 24 日）

(33) 「大谷光瑞と中国」富山県日中友好協会講演（富山第一ホテル,2012 年 2 月 11 日）

(34)「日華学堂について」中国留学生史研究会（神奈川大学箱根保養所,2012 年 3 月 30 日）

(35) 「日華学堂と仏教者の役割について」日本近代仏教史研究会夏期セミナー（身延山大学,2012 年 9 月 3 日）

(36)「台北「西本願寺広場」と高雄「逍遙園」について」第 21 回日本近代仏教史研究会（大谷大学,2013 年 5 月 11 日）

【書評】

(1)「中日文化交流史上令人難忘的人『王韜評伝』華東師範大学,『歴史教学問題』1992 年 6 月.

(2)「中国と日本の留学交流－担当者のために基礎ノート－」を読んで
『新潟大学留学生センター紀要』2 号, 2000 年 3 月, pp69-71.

(3)「文如其人」『馬洪林文集』に寄せて　新潟大学東アジア学会『東アジア・社会と文化』12 号, 2004 年 3 月, pp20-23.

(4)『多民族社会の言語社会学』－英語をものにしたシンガポール人のアイデンティティー『新潟大学国際センター紀要』4 号, 2008 年 3 月.pp77-81.

(5)「現在日本に至るチベット観の系譜を探る」 高本康子『近代日本におけるチベット像の形成と展開』,『東方』355 号、2010 年 9 月, PP31-34.

(6)『大谷光瑞とアジアー知られざるアジア主義者の軌跡ー』, 自著を語る『近現代東北アジア地域史研究会』ニュースレター 22 号, 2010 年 12 月, pp91-93.

(7)「大谷探検隊研究新段階へー新資料・外務省外交記録の活用」白須淨眞『大谷探検研究の新たな地平ーアジア広域調査活動と外務省外交記録ー』,『東方』385 号, 2013 年, pp28-31.

【翻訳】

(1)「旅順博物館所蔵新彊出土の古文物（一）」龍谷大学仏教文化研究所・西域研究会, 1993 年 6 月, pp93-116.

(2)「大連図書館“大谷文庫”蔵書について」龍谷大学史学会『龍谷史壇』113 号, 1999 年 10 月, pp75-90.

(3)「浄土真宗を中心とする日本仏教の大連・青島における布教活動」龍谷大学仏教文化研究所『龍谷大学仏教文化研究所紀要』39 集, 2000 年 11 月, pp133-139.

(4)「旅順博物館所蔵ガンダーラ仏像について」龍谷大学東洋史学研究会,『東洋史苑』60.61 合併号, 2003 年 3 月, pp1-23.

(5)「シンガポールにおける言語の変遷と華語の特色」『アジア遊学』123 号, 2009 年 6 月, pp54-64.

(6)「大谷光瑞と青島－大谷光瑞および西本願寺と青島との関係について」, 柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア－知られざるアジア主義者の軌跡－』, 勉誠出版, 2010 年, pp170-186.

【所属学会】

(1) 現代中国史研究会
(2) 上海史研究会
(3) 台湾仏教研究会（編集委員）
(4) 東洋史研究会（京都大学）
(5) 東洋史学研究会（龍谷大学）
(6) 中国留学生史研究会
(7) 日本近代仏教史研究会
(8) 日本宗教学会
(9) 東アジア学会（新潟大学）
(10) 東アジア仏教運動史研究会
(11) 仏教史学会（龍谷大学）
(12) 龍谷史学会